

年の瀬迫る12月26日、鳴門教育大学にて研修中の2名の長期研修員とそれぞれの担当教授に面会するために、同大学を訪問しました。現在研修しているのはSMASSEケニア本部のスタッフで、生物科所属のキジト (Mr. Makoba Kizito:28 Nov 2001- 31 Mar 2004)と数学科所属のナンシー (Ms. Nancy W. Nui: 25 Sep 2002- 21 Mar 2005) の2名です。彼らは国際協力事業団の技術研修員受け入れ事業、すなわち1999年度から開始された長期研修員(留学生受け入れ)制度を利用し、日本の大学において修士の学位取得に取り組んでいます。なお、この学位取得型の長期研修員として留学している研修員は、年間約300人程度(2001年度)であり、2001年度は新規に83名を受け入れています。

キジト研修員は現在、同大学自然系(理科)教育講座、佐藤勝幸助教授の研究室に所属しています。彼は来日後の最初の半年間に日本語研修を受け、2002年4月から大学院の一年生として単位取得に励んでいます。授業は日本語のみで行われるものや、英語と日本語で行われるものなど、授業によってまちまちですが、同級生に通訳や翻訳を手伝ってもらったり、講義後に英語による補講を受けたりして、苦勞しつつも懸命に努力して単位を取得しているようです。また空いた時間にはケニアの理科教育の参考になるようにとの考えから、日本の中学校の理科の教科書を英訳したそうで、留学中に吸収できるもの何でも取り入れようとする、前向きに努力する姿勢が感じられました。修士論文のテーマも丁度決まったところで、The perception of stuff development by Japanese science teachers as a means of improvising their professional abilityというものです。担当の佐藤助教授の専門は細胞生物学ですが、キジト研修員に対しては、新しい取り組みとして理科教育学に関するテーマを設定したということです。このことはSMASSEプロジェクトにとっても非常に有益なことであり、キジト研修員の修士の学位論文が、ケニアに帰国後にもプロジェクトに役立つことが期待されます。

ナンシー研修員は来日して3ヶ月あまり。現在は日本語研修中です。2003年4月からは同大学学校教育実践センターのセンター長、斉藤昇教授の研究室に所属し、数学教育について勉強する予定になっています。斉藤教授の専門分野は数学教育学であり、また国際協力事業団の短期専門家をされたご経験があります。研究室にはフィリピンからの留学生も所属しており、勉強する環境としては大変恵まれているように感じました。

今回の訪問ではケニア人カウンターパートの日本での研修状況を見ることができましたが、それと同時にそれぞれの担当教授にSMASSEプロジェクトの概要を説明し、先生方にプロジェクトについて理解していただくことができました。これは今後の日本での研修を効果的に進め、また研修の成果をケニア帰国後に有効に生かしていくためにも、非常に意義の有ることでした。今後も機会があれば、積極的に研修先訪問を行っていきたいと思います。